

旧鹿児島貯木場(左上:昭和30年代撮影、右上:昭和40年代撮影、左下・右下:昭和47年撮影)

写真：鹿児島森林管理署所有

旧鹿児島貯木場
屋久杉等海上輸

鹿児島大学農学部 奥山洋一郎

旧鹿児島貯木場のはじまり

屋久島からの木材出荷を支えた「安房船溜まり」

）です。旧鹿児島貯木場の整備には、鹿児島県内の離島や道路が未整備だった大隅半島から木材を集積して、隣接する貨物駅から全国に出荷する目的がありました。明治39年11月に、鹿児島駅の鉄道用地の一部0・9haを鹿児島大林区署の貯木場用地に組み替え、明治40年に民有地2・1haの買上を行い、同年7月に工事着工しました。浅瀬部分の浚渫と、その土砂による埋立によって用地は拡張され、完成時の面積は、陸上7・1ha・専用海面2・4haとなり、明治38年に整備された青森貯木場と並び、当時は国内最大級の貯木場であったとされています。

本林業遺産は、旧鹿児島貯木場に加え、屋久島町に所在する木材の出荷施設だった「安房船溜まり」も選定されている点が特徴です。屋久島から鹿児島貯木場への木材・木炭の積み出し港は主に安房と宮之浦でした。残念ながら宮之浦港には遺構は残されていませんが、安房港には、安房貯木場に隣接して当時の積み出し岸壁（船溜まり）が現存しています。安房貯木場は現在も一部残る森林鉄道（林業遺産No.19「屋



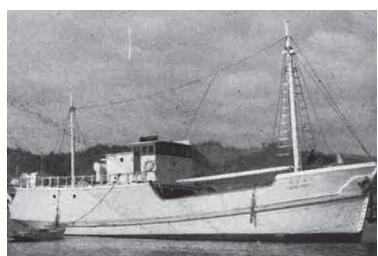
安房船溜まりの現在(令和7年撮影) 撮影: 奥山洋一郎



官船(景山丸)
写真:鹿児島森林管理署所有



官船(開聞丸)
写真:井上日呂登氏所有



官船(南嶺丸)
写真:鹿児島森林管理署所有



官船(錦嶺丸)
写真:鹿児島森林管理署所有



開聞丸殉職の碑(慰靈碑)
撮影:奥山洋一郎



旧鹿児島貯木場の現在(令和6年撮影)
写真:鹿児島森林管理署所有

久島の林業集落跡及び森林軌道跡」として2016年度に登録)の起点であり、島の中央部に位置する小杉谷方面から木材を運び出して集積する拠点となっていました。大正12年から安房漁船が運用開始され、以後屋久島から鹿児島貯木場への木材の移出を担いました。

官船による輸送と戦時中の悲劇

島森林管理署 所有の木材運搬用の官船でした。昭和10年度から昭和59年度までの約50年間、景山丸、開聞丸、南嶺丸、錦嶺丸の計4隻が運行されました。他にも青森営林局で官船運用の実績がありました。鹿児島の官船は規模が大きく国内の林業史を考えるうえでも稀有名な存在と言えます。また、戦時の昭和20年3月には、開聞丸が屋久島に向かう鹿児島貯木場を出港後、米軍機動部隊の航空攻撃を受けて沈没し、9名の乗組員と屋久島からの便乗者8名、合わせて17名が犠牲となる悲劇に見舞われました。戦後の昭和26年に慰靈碑(殉職の碑)が設置され、鹿児島森林管理署敷地内に現存しています。

戦後、屋久島の森林開発が本格化する中で、鹿児島貯木場は国有林における木材集積、加工拠点として重要な役割を果たしました。しかし、昭和57年に樹齢1000年を超える屋久杉の伐採が停止され、屋久島からの木材移出量は激減します。また、大隅半島の道路整備も進み、海上輸送の必要性が薄くなり、昭和59年度で官船輸送は廃止されます。鹿児島市が発展する中で周辺の再開発が進み、貯木場用地も平成に入り段階的に売却・縮小され、平成18年8月23日に貯木場としての役割を終え、廃止されました。現在は、貯木場敷地であつた1haのうち1.36haが鹿児島森林管理署の管理地として残されています。また、護岸敷には、荷揚げ場や斜面岸壁などが利用時に近い姿で残され、往時の歴史を静かに語り継いでいます。

官船輸送・旧鹿児島貯木場の縮小、廃止

おわりに

本林業遺産の特徴を整理すると、(1)木材の集積地であった鹿児島市の歴史遺構が市街地に所在していること、(2)全国でも希少な木材海上輸送、官船運行の貴重な歴史史料であること、が挙げられます。市街地である利点を活かして、鹿児島大学農学部では、鹿児島森林管理署・屋久島森林管理署の協力を得ながら、学生が林業史を学ぶ授業を実施しています。

今回の林業遺産選定を契機に、市街地に残る貴重な遺産を次代に引き継ぎながら、森林との関わりを幅広く学ぶ場としての活用を考えていいくことが期待されます。



鹿児島大学農学部学生への講義 撮影:奥山洋一郎